

## 立原道造と信濃の花々

—

その日は 明るい野の花であつた  
まつむし草 桔梗 ぎぼうしゆ をみなへしと  
名を呼びながら摘んでゐた  
私たちの大きな腕の輪に

また或るときは名を知らない花ばかりの  
花束を私はおまへにつくつてあげた  
それが何かのしるしのやうに  
おまへはそれを胸に抱いた

その日はすぎた あの道はこの道と  
この道はあの道と 告げる人も もう  
おまへではなくなつた!



信濃の花スケッチ

私の今の悲しみのやうに 兼には  
一むらの花もつけない草の葉が  
さびしく 曇つて そよいである

—立原道造「甘たらく感傷的な歌」

最初に立原道造の百余篇程の十四行詩のなかで、例外的に花に関する固有名詞の多い作品を挙げてみた。

この詩では「まつむし草 桔梗 ぎぼうしゆ をみなへし」という信濃高原の花々が、まるで歌のように、その詩に歌いこまれてある。この詩の魅力の秘密は、この花の名に負うところが多い。この花々の名から導き出されるものは、浅間を背景にする軽井沢、追分のさわやかな夏の光である。その歌うような花の名は、もう少し注意して読んでみると、六音、四音、六音、四音の繰り返しになっている。従って、他の花の名ではこの歌うような抒情の律動は求められない。そういう言葉の秘密のやうなものが、この花の名にはある。そして、もうひとついえば、これらの高原の夏の花々は紫系の花ばかりなのである。

この高原の透きとおる紫水晶のような花を摘んで、無心に花束を作る少年少女。そしてまた、ある日には、美しいけれども名も知らない花束を作り、少女に捧げる少年、その花を胸に抱いた少女の夏。それは詩の世界のものであるけれども、いつの時代の少年少女にも夢のなかに重層化されて、ひそかに育て続けられているものである。

しかし、詩の後半はそういう美しい夏の日を、もう思い出でしか歌えなくなつた青年の嘆きが歌われている。あのかつての幸福の花々はもう季節を終つた。青年はかつての思い出の叢を悲しげに彷徨い歩くばかりだつた、——と。そこで、あの夏の花々は、花そのものから、昇華して、夏の日の輝かしい青春そのものに詩人の胸のなかに結晶する。

立原の詩のなかの花は、いつもこんな風に歌われているのであつた。

「風と雲と、花と愛の詩人」という立原道造のイメージは、若い彼の詩の読者によって自ずから作られたものではあるが、立原の抒情詩に魅せられた若い読者たちは、